

法人 氷河・雪氷圏環境研究所)

サイトJとバード基地と ドームふじ基地

庄子 仁

南極観測は、国際協力が基本である。それは、科学が国際協力によって支えられ発展するからであり、科学立国を目指す日本として当然のことであろう。

1989年春、日本独自のプロジェクトとしては初めて、グリーンランド内陸サイトJ浅層コア掘削が行われた(藤井調査隊長)。沿岸部のサンダー・ストレムフィヨルド(現在のカンガルーズアーク)からグリーンランディック・エアーの双発機をチャーターして、約200km内陸に入った地点を選定しキャンプした。同じ時、内陸中央部では欧州隊のGRIP計画(正確には、その前身)が、やはり浅層コア掘削を行っていた。サイトJの調査開始が比較的順調であったのに対し、撤収はかなりもたついた。航空機会社の運用スケジュールに、突然、優先性の高い仕事が入って我々が後回しにされたためと、悪天候のせいである。安全確保と種々打合せのために毎日GRIPと定時交信していたが、そのおかげで、調査完了後無事、撤収できた。欧州隊の(忍耐強い)この協力こそ、

科学の基本であろう。調査中の短波ラジオからは、第2次天安門事件が報じられていた。

1989年秋、米国隊の南極バード基地浅層コア掘削に参加した(ラングウェイ調査隊長)。米国隊とは、ハワイで合流予定であった。マイアミ空港に到着して間もなく、本土からの航空便が軒並みバタバタと、遅れやキャンセル状態になった。サンフランシスコで大地震があったという。米国隊とは連絡が取れず、航空カウンターであらゆる可能性を議論して、結局何も判らなかった。これで調査がキャンセルになるとも思えなかった。とりあえずニュージーランド(クライストチャーチ)まで行くことに決め、チェックインしてすぐ驚いた。米国隊がそこにいた。シアトル経由でたったいま到着したと言う。その証拠に、この手つかずのビールジョッキを見ろと言う。笑い、そして笑った。その後、クライストチャーチでも、マクマード基地でも、あれやこれやで待たされた。グリーンランドではよく聞く「Hurry up and wait!」が、ここでも使われた。マクマードの基地内放送からは、ベルリンの壁の取り壊しが報じられていた。バード基地では、ブルドーザーでトレンチを掘ったが、嵐のあと壊れた。サイトJを思い出した。無事、

調査終了後、撤収は速かった。

1993年秋、第35次隊員として晴海を発ち昭和に向かった（渡邊観測隊長、横山越冬隊長）。ドームふじ基地の建設に参加した。南極に着いてみると接岸不能であった。あらゆる日程を練り直した。そのの底板が、ワイヤーで削れた。軽油が一部凍って、給油・運転作業に支障が出た。新型雪上車の故障も出た。小型ショベル車に、油漏れがでた。でも結局、「建設作業は順調に進み、基地は完成した」。越冬終了間際に、神戸の大地震が報じられていた。

科学は、課題(問題)解決の作業だという。それが国際レベルの課題であれば、国際的な協力が当然である。南極に国境はなく、その科学協力に国境はない。（35次冬・雪氷）

探検隊長の決断

渡辺興亜

南極観測で多くの人との出会いがあったが、観測隊の何たるか、特に隊長の決断ということを知ったのは第15次南極観測隊村山観測隊長からであった。最初に村山さんにお会いしたのは私が第9次南極観測隊の隊員候補になった時で、まだ北大低温科学研究所の大学院生の若輩の時である。その頃、北大には極地談話会という「宗谷」時代の観測隊

OBの集まりがあり、木崎、川口、楠、小野、鈴木、石田という錚々たる観測隊OB達がおられた。学部学生の時、許されてその末席に連なっていたのである。そうした人達のすすめで低温研の大学院に進むと、第5次隊の越冬から帰って来られた大浦先生が指導して下さることになった。大浦先生は村山隊長と小型雪上車による南緯75度までの内陸旅行をされたのである。そんな縁で、大浦先生の推薦で第9次隊の隊員候補になったのであるが、身体検査で問題があって、参加はむなしく夢果てたのだが、その経験はその後の人生にプラスであったと思う。人生万事塞翁が馬を実感している。参加は出来なかったが村山さんとは何かの縁がそのとき出来たように思う。

それから6年後、私の二度目の南極行の隊長が村山さんであった。このとき村山隊長との大きな出会いとなった。

村山隊長の昭和基地—南極点往復旅行の成功によって、わが国の内陸観測は本格的展開の時代を迎えたのである。私もその展開の推進役として多いに貢献したと自負している。それはさておき、内陸展開にはおおきな問題点があった。二代目観測船「ふじ」の能力不足である。昭和基地のあるリュツォ・ホルム湾の厚い

定着氷は初代「宗谷」の侵入を寄せ付けず、満載排水量9,000屯の「ふじ」の運航は大いに期待されたが、就航時の7次から11次までは昭和基地接岸ができたが、その後は定着氷縁より中に進むことができなかったのである。「ふじ」の砕氷能力100cmに対し、定着氷は150cm以上となり、もともと無理があったのだが。接岸できなくなると困るのは燃料油の輸送と大型資材の輸送である。接岸すると、パイプラインを仮設し、一気に船から基地タンクへ油が送られるのだが、接岸できないときはドラム缶に詰めてヘリコプターで運ぶので時間と労力を要するのである。それでも油は時間をかければなんとかなるが、こまるのは分解出来ない大型資材、特に雪上車である。小型雪上車は分解輸送されたが、大型のKD60(南極点旅行用に開発)は分解できないため、何年も昭和基地への運び込みが出来なかったのである。広域に展開されていた内陸調査の運営にも大いに影響を及ぼしていたのである。

そこで、村山隊長の出馬である。定着氷縁に辿り着き、そこから一歩も湾内に入れずにいた「ふじ」から氷上輸送で重量7屯の雪上車、居住カブスなどを運ぼうというわけだ。氷上輸送というのは最初の1次隊以

降ほとんど行われていないのである。しかも、昭和基地までは60~70kmもある地点からである。

氷上輸送の指揮官は村山隊長、私と寺井(啓)が調査隊員である。小さなヘリコプターに氷に穴を開けるオウガーを積み、1km毎に下ろされ一点先まで行って調査隊員を下ろして帰ってくるまでに氷の厚さを計るということを繰り返すのである。幸運なことに南極の夏には夜がなく、何時間でも働けるのだ。とはいえ、36時間近く調査を続けるといかに元気澆刺たる我々でももういい加減にしてくれという心境であった。ルートがほぼ確定し、氷上輸送が可能となったときの隊長命令は即刻出発であった。一晩位休ませて欲しいというのが本音であったが、ここは南極、それなりの判断だと出発し、そろそろ「ふじ」が小さく見える頃、一休みし、ピフテキでも食ベビールでも飲むかと氷上行進を停止していたら隊長から交信「なぜ止まっているのかの」ご下問であった。食事中ですと答えると「そうか」ということであったが、その時「ふじ」周辺では大変な事態となっていたのである。数時間前までしっかりしていると思えた定着氷が一気に割れたのである。その上に2、3時間前まで雪上車その他が置かれていた氷である。

その事態は昭和基地に着くまで知らなかったが、知ったときこれが極地探検隊長の決断であることを深く認識したのである。今やれることは直ちにというのが極地生活の要諦であるが、村山隊長の行為からそれを教わったのである。(ARKTOS アークトス、5-6p、39号、2007.3.10)
(11、15次冬・雪氷)

村山雅美さんの思い出

芳野赳夫

私にとって最も重要な村山さんについての思い出を記したい。村山さんは日本山岳会、第3次南極観測隊員、その後は山や極地研究、南極関連事項等を通じ、亡くなられるまでの50年以上のお付き合いを戴いた。その間には数えきれない程の思い出があるが、私の今日の人生に関して大きく関わることを含めて、それらは懐かしさと共に無限に深い記憶の底から湧きあがってくる。村山さんについてはいろいろの方々からその人物像について述べられているが、それらの中で、村山さんが新しい萌芽的研究に対して、これを真剣にバックアップする姿勢を持たれていた一面について述べてみたい。

村山さんが第3次観測隊長で、私が越冬隊員であった時、失礼ながら当時の村山さんは隊長としてまだ粗

削りな時代で、特に観測関係への関心の程度については誰もよく知る者が居なかった。3月頃になると越冬態勢に落ち着きが見え始め、大陸上に旅行隊が出掛け始めた。当時は旅行隊が大陸氷冠上を旅行する場合に、どのようなアンテナを用いれば基地局と効率よい通信が確保できるか、それ以前の各国の文献にはこれを解析した論文等の情報は皆無であった。

この問題に気が付き、村山さんにこの研究を申し出ると、是非やってみろと許可された。大陸上に立ち雪原を見て、氷の厚さが平均2千メートルあると聞き、もし南極の低温下で雪原の表面を構成する雪の比誘電率が自由空間値の1に近いならば、旅行隊はあたかも飛行中の航空機に似た状態になると半ば直感的に感じた。当時の通信は低い周波数の短波を使用していたが、塔などを立てなくても、直接アンテナ線を雪面上に置くだけでアンテナとして動作し、良好な通信ができるのではないかと考え、実際に菱形アンテナを、指向性を基地方向に合わせて雪面上に展開したところ良好な通信が出来て、直感した通りの結果が得られた。

そうならば、次はしっかりと実測し、測定値を基にこれに関連する現象を解析してみたいくなるのは常である。5月に村山さんと昭和基地の南

方約25kmに展開するラングホブデ露岩地域に調査旅行に出かける機会があった。私はこの時村山隊長に恐る恐るこの実験を、日を改めてやりたいと申し出た。この実験は、当初第3次隊の観測項目には入っていなかったもので、駄目だと言われるのは覚悟していた。しかし、事情を説明すると村山さんは急に、「面白い、やって見ろ」。それまで、村山さんは学問的な事にはあまり熱心ではないという印象を持っていた私は、この萌芽的研究、今日で言うベンチャー的な研究課題に対して正しく理解し、これを認めてくれる度量を持った人であるということを初めて知って本当に感銘を受けた。

当初から雪面の比誘電率の測定は計画に無かったので、測定装置などは何もなかった。やむなく、基地内に在った通信用機器の補用品やがらくたの中から何とか測定器を作り、氷の中から掘り出した1次隊の簡易Qメーターの動作が確認できたので、これで何とか基本的データがとれるとして9月を待った。

しかし、春になるとガソリン残量が厳しくなった。隊員はそれぞれの計画にガソリンを割り当てて貰うべく喧々囂々の会議が続いた。これでは私の雪の誘電率の測定は問題にされないのではないかと恐る恐る名乗

りを上げた時、村山隊長が2日だけ芳野に行かせてやれと強く援護射撃をしてくれた。この甲斐あって1日分のガソリンの使用が認められ、故清野善兵衛隊員の協力を得て丸1日大陸上で必死になって測定を行うことができた。もちろん、村山隊長の行為に対して深甚の謝意に包まれての一日であった。

私は昭和基地からオーロラオーバルに沿うモーソン基地と短波の定時交信で、磁気嵐やオーロラの影響を受けて通信状態に影響が顕著に出ることを経験していた。一方、オーロラオーバルに関係なく南極大陸を横断し反対側のマクマード基地間の短波通信は、地磁気の影響は少ない筈にも拘わらず、理論値より常に電界強度が低いことに気付いていた。大陸上での実測値は、基地との通信で雪面上にアンテナを展開した時に推測した通り、雪面の雪の比誘電率が空気に近い1.1値で、雪面で反射する短波電波の反射率が非常に低く、南極氷冠表面で反射する短波の大部分の電波エネルギーは雪面下に侵入する。また測定値は比誘電率が深さを増すと徐々に増加して、深さ250メートルで比誘電率が約4に達する事を示したので、雪面から侵入した電波が平均2,000メートルの氷内を下降伝播するうちに次第

に減衰し、底の岩盤で反射して雪面に戻る間にエネルギーの大部分は氷に吸収されることを実証できた。

この成果は、村山さんの強い希望で3次隊の公式成果報告中に取り入れられた。帰国後3年して、突然米国のIEEE(電気電子工学会)のアンテナ・電波伝播研究会から1965年夏ワシントンDCで開催の国際シンポジウムに航空券付きで招待講演の依頼が舞い込み発表を行った。そこで、私の研究が1958年に南極でC-124グローブマスター輸送機が大陸の雪上に突っ込み大惨事を引き起こした原因の解明に大変役立つ成果として、米国内で高く評価されていることを知った。航空機が海氷上を電波高度計で高度を測定しながら大陸氷上に差し掛かると、氷に侵入した電波は深さとともに誘電率が上昇するため電波の速度が遅くなり、電波高度計は高度が上昇したように表示する。ホワイトアウトの状態では操縦士は高度が上がったと思い高度を下げ雪面に突っ込んでしまう。この原理をヒントとして、私は後に電波氷厚計(アイスレーダー)を開発し、村山さんの第9次隊の極点旅行に使われ、現在まで使用されている。

第3次隊での研究成果をまとめた私の論文は、IEEEのAP論文誌に

掲載され、図らずも1967年の最優秀論文賞(1967 Best Papers Award)を受賞した。

この栄誉は、村山さんが私の思いつきを理解して、第3次の計画には無かった私の観測希望の意義を認めて多大の便宜と援助をして頂いた結果、世界で初めて成功したものである。この受賞に対して、最も喜んだのは村山さんであり、亡くなるまで例のからかい半分の口調の中で陰に陽にこの成果を広めて戴いた。真に村山さんは私にとって永遠の思い出の人であります。ご冥福を祈ります。

(3次冬・機械電気、17次冬隊長)

村山さんとの出会い

芦田成生

11次隊の頃南極事務所は上野の国立科学博物館極地部に在ったので、帰国間もない村山さんとお会いしたか記憶は定かでない。村山さんが極点旅行に成功し、それに興味を持ったことは私の本棚の蔵書に昭和44年9月発行「極点への道」が未だに存在しているので確かなことである。村山さんにお目にかかったのは、恐らく11次越冬後帰国してからの極地研究センターであっただろう。親しく口を訊くようになったのは14次隊員に決まり、頻りに極地研に出入りするようになってからだと思う。確か、義兄の

親友で、私の大学の先輩が南極に行きたいとの希望を村山さんに伝えたことがある。村山さんとの思い出は2件の事柄が残っている。どちらも15次隊長として南極に行かれたときである。

一つは隊員達が基地に来られて、村山さんが一人の隊員に「横井さん、横井さん」と声を掛けているので、私はその隊員の名前を「横井さん」と信じ込んでいた。暫くするとそれは本名でなく、仇名と判明した。15次隊が出発した前年に、「グアム島」から「横井庄一さん」が発見された。理由は、その隊員が「ふじ」が出港してからフリーマントルに着くまで船酔いで一度もベッドから起きだせなくて、カーテンを引き潜りっぱなしだったので「まるで横井さんみたい」となったので村山隊長が名づけたそうである。

2つ目は、私が14次隊越冬を終了し、「ふじ」が昭和基地を離れた帰路、「コントラクトブリッジ」を多少知っていたことで、村山さん、楠さん、岩永さんたち相手の「ブリッジ」を始めた。午前中は起きるのがいやで、ベッドに入っているが10時ころになると「おい、やるぞ」の電話が来て叩き起こされた。その後は、極地研や南極倶楽部でお会いすると、「おー」と親しく声を掛けていただいた。

(11次、14次冬・ロケット)

村山雅美隊長追悼文

吉川暢一

私が村山隊長と初めてお逢いしたのは、第10次南極観測越冬隊の医療担当として南極昭和基地に行った時でした。第9次隊の極点旅行隊が昭和基地に帰還されたのが、昭和44年2月15日の午後でした。約5ヶ月間に及ぶ5,180kmを死闘の覚悟で南極点までの往復旅行を無事終えて帰られた、村山隊長をはじめ南極の猛者達は日に焼け精悍な感じがした。先ず、第九居住前の広場で歓迎会が開催され、10次隊楠隊長の歓迎挨拶と慰労の言葉があり、次いで極点旅行隊の村山隊長から日本人として初めて極点到達の瞬間の感激の挨拶があり、その後、ダルマの目に墨を入れて極点旅行の成功を祝った。翌16日には9次隊極点旅行隊員と10次隊内陸調査隊との連絡会が開催され、9次隊の残してきたデポ地点とその量について詳しく説明があり、次いで、各部門別に雪氷班・装備班・食糧班・医療班・その他一般について、食事当番の苦労話、クレバス地帯の注意事項、医療面ではビニール袋やガーゼを多く持参するように、隊員の体重は3~6kg瘦せたこと等の説明を聞いた。実

際、我々が3ヶ月間「やまと山脈」への内陸調査旅行に際して、それは非常に参考になった。

旅行隊員の健康診断を行った後、「オングル診療所」において、9次隊の小林ドクター・大久保ドクター10次隊の医学担当の蜂須賀隊員、それに私の医療班に村山隊長の参加を頂き5名で隊員の健康面での注意事項、旅行中の健康管理、9次隊旅行中にアクシデントがあり怪我についての注意などについて説明を受けるなど、最後のお別れパーティは朝まで続いた。昭和44年2月20日、第10次隊の越冬成立式がヘリポートで開催され、9次隊のヘリが何回も昭和基地の上を旋回して遂に北の空に消えていったのを覚えている。

平成11年の初めに村山隊長の肝いりで南極・北極に関係した総ての人の集まりの「南極倶楽部」をたちあげられ「会報」も発行され今も継続されている。

村山隊長の発想で2003年10月に8日間の南極観測隊員がヒマラヤのマナスルの麓でスケールの大きな「南極OB同窓会」を計画された。この目的の一つには日本の南極観測は「宗谷」に始まり、「ふじ」、「しらせ」と一時中断はあったものの今まで継続されてきたが、「しらせ」も老朽化して、2008年（平成19年

年度）で退役の予定で、その後の後継船建造が議論されたが、日本の財源は盡ならず南極観測の継続も危ぶまれており、今まで50年も続いた南極観測をここで中止すると言うことはあってはならないと、南極観測継続を南極OBによる南極アピールのためにこのヒマラヤ旅行を計画された。「南極倶楽部ヒマラヤ紀行マナスル遠征50周年記念」は「会報第19号」に詳しく報告されている。村山隊長（85歳）を筆頭に南極観測OB21名が参加し三つのコースに分かれてヒマラヤを散策した。最後にネパールの景勝地「ポカラ」に集結しサランコット頂上のホテルで野外焼肉パーティで村山隊長のヒマラヤから南極への経緯の詳しい説明があり、南極に対する情熱が伺われた。ネパールの最後の宴はポカラの筏で渡る有名な「フィッシュ テイル ロッジ」で盛大に開催された。丁度、ポカラに建設中の「国際山岳博物館」を現地でボランティアチーフとして活躍中の安藤久男（第10次隊越冬）さんから説明を受け見学し、夜の宴には安藤夫妻も参加され賑やかな会となった。

ヒマラヤ紀行終了後、ネパールで大変お世話になったヒマラヤ観光開発会社宮原社長の実家田沢温泉「富士屋ホテル」で反省会が開催さ

れ、ヒマラヤの話・南極の話に花が咲いた。

村山隊長が楽しみにされていた南極観測50周年の記念式典に参加されることなく、また非常に気にされていた「しらせ」の後継船の進水を見ることなく、その直前に亡くなられたことは誠に残念無念で悲しい出来事でした。南極観測発展のためにはなくてはならない人であり本当に残念でした。(10次冬・医療)

村山先生の思い出

青柳直大

昭和59年頃、当時の出張病院の恩師である小林昭男先生に連れて行って頂き、砂土原の御自宅でお酒を御馳走になったのが、初めてお会いした時です。

昭和60年、27次の乗鞍の訓練時に清泉荘の布団部屋のような所で面接を受け、何とか合格させて頂きました。27次では出港時とフリーマントル以後の艦旅よりあすか基地の作業まで御一緒出来ました事は幸運でした。平成6年頃に小林先生と御二人で栃木の拙宅に遊びに来て頂き、当時3才の長男(現高1)を膝の上に抱いて絵本を読んで頂いている写真を家宝として大切にしています。南極倶楽部には0~157の番号が適しているとの事で桐箱に

157と書かれたタイピンを頂いております。数年前から小生の専門分野である前立腺のお話などを時々電話で話させて頂いておりましたが誠に残念な結果となってしまいました。平成15年に他界した父と同年のお生まれなので思い出もひとしおです。沢山の思い出を頂き有難うございました。御冥福をお祈り申し上げます。(27次冬・医療)

村山先生を偲ぶ

五味貞介

至極院浄峰雅徳居士様

ありがとう御座いました。

私の南極への一步の思いは、村山先生に始まり、その思いを実現させて頂き下さったのが、川口貞男隊長でした。昭和31年、西堀先生が初の越冬をされました。第2次隊で村山先生が行かれましたが、越冬が出来ず犬を残し帰国、第3次隊で再度行かれ、タロ・ジロの2匹の犬が生存。そのニュースを新聞紙上にて知り、南極への思いが始まったのでした。

当時、私は大阪にて板前の修業時代で、その時思った事は、南極へどのような方達が行かれるのだろう、との思いでした。その後、オビ号の事など南極のニュースは、いの一歩に目に入り南極への思いは募るばかりでした。昭和43年だと思えます

が、日本料理研究会月刊誌に南極越冬隊・食糧担当の記事が記載され、早速、日本料理研究会の会長、三宅実子さんに手紙を出し、面会を申し出ました。三宅会長より電話があり「いつでも良いから出ていらっしゃい」との事。段取りをつけ、速、上京。南極への夢が一步前進したのでした。

その後、南極への思い一心で、第13次隊の川口隊長に拾ってもらい、越冬参加と相成り夢が実現しました。13次隊の乗鞍冬期訓練の時、村山先生は訓練隊長でした。先生に同行して頂いた事は、夢のまた夢であった事に間違いありません。越冬隊に選ばれ昭和46年8月1日、文部技官・第13次隊員として、文部大臣から辞令を頂き、夢を見て15年目に実現したのでした。当時、極地研は上野の博物館内の極地研究センターであり、村山先生はセンター長でした。その後、板橋へ移り国立極地研究所が創立され、企画調整官として就任されたのが村山先生でした。

当時の極地研は旧陸軍の倉庫跡で、お化け屋敷と言った所で、今思うに、とっても懐かしく思い出されます。

村山先生は、とっても気さくな方で夕方になると、よく、裏の我々の宿舎に顔を出され「ポッピー、行くか」と、ポッピーの焼酎割りに誘ってくれ

ました。そんな時、よく話された事はタロ・ジロの事で、2次隊で犬を残し帰らなければならなかった事など、当時のご苦労話をし、そして、「犬殺し、死んでしまえ」と書かれた手紙なども見せてくださいました。市ヶ谷のご自宅で奥様の手料理を頂き、酔っ払い、その場で先生と大いびき。今思い出せば、まるで先生の息子のように。

ある時、奥様が「五味さん、お料理なさるようになって何年なの」と聞かれ、「35年です」と答えると、「私は40年よ、私の方があなたの先輩ね」とさらっと言われ、その後は奥様を先輩と言う事にしました。

越冬帰国後もいろいろなお付き合いをして頂き、岐阜の中津川での松茸狩りに行った時、南極物語が始まった時でした。「風林火山」という山菜を食させる所での出来事でした。そのお店の子供さんが南極物語のポスターを持って来て、それに先生のサインを欲しいとの事でした。先生は、サインは絶対しない方で、私にそっと「書いてくれ」と言われ、困った事もありましたが、とても人間性の温かい方でした。

「五味君、人間は一人では何も出来ないが、何事もやる気があれば、そのやる気を支えてくれる人がいる。その支えてくれた事に感謝を持つ事

が大切や」といろいろな人生論を考え
ていらした先生でした。私は、素晴
らしい先人の方々に恵まれ、人生感
を最高に導いて頂いたのは、南極へ
参加できた事で、今も尚、専門委員
として無力ながら続けさせていただ
いている事に感謝の思いです。観測
隊員に選ばれ、約千人を越える隊員
がいますが、行った事にOBの方々
ももう少し感謝の思いを持たれても
良いのではないかと思います。己の
利のみしか考えられない者が多い時
代ではありますが、南極観測隊に選
ばれた者ならば、もう少し高度なる
考えも持つべきだと思います。

私はこのように思う、
「人生に不可能は無い、やる気と努
力のみ」

(13次冬・調理、伊勢路料理
五峯庵 家主)

南極観測隊 よみがえる昭和基地

多賀正昭

もう41年も昔のことになるが、
村山先生がお書きになった「南極観
測隊 よみがえる昭和基地」の本が
ある。その本は、第7次南極観測隊
長として4年の空白をこえてはたさ
れた昭和基地再開の記録である。

処女航海の「ふじ」が無事その任
務を果たして東京港に帰ってきた
1966年(昭和41年)、4月8日、

その日からわずか3ヶ月後に出版さ
れた。この猛スピードに村山先生の
意気込み熱き思いが凝縮されている
と思っている。

文中に「我々は南極に帰ってきた。
昭和基地は恒久観測基地として、面
目あらたに〔人類の契約の地〕南極
大陸へ復帰した。」と成功の喜びを高
らかに歌い上げられ感動が伝わって
くる。

私がこの本に出会ったのは、第8
次鳥居隊長のもと、機械担当隊員と
して南極行きが決まった26歳の夏
であった。

その当時、隊員は上野の国立科学
博物館 極地部、村山極地部長の個
室に隣接した事務室で準備にあたっ
ていた。村山先生のお話が直ぐに伺
える恵まれた環境でこの本を片時も
離さず読みかえした。「面目を一新し
た昭和基地」の章は、設営隊員にと
って最高の手引書であり、基地要覧
として胸の高まりと共に活用させて
頂いた。

また、南極観測長期年次計画に付
いても述べられており、第9次隊で
の極点までの内陸調査旅行、それ以
降での、世界に先駆けてのロケット
発射による超高層物理の観測、昭和
基地を恒久的に運営する為の中核的
研究機関としての「極地研究所」の
設置を急ぐことを提唱されている。

どの項目も未曾有の困難極める事業をすべて打ち立てられ完成されたことに、あらためて畏敬の念を禁じ得ない。

またこの本にはさめてあった村山先生より頂いた書簡(1988年(昭和63年)11月3日付)を懐かしく読みかえしたところ、村山先生の行動力の凄さが如実に輝いているのでご紹介させていただきたい。

「小生にとって今年は、いろいろなことが続きました。ちょうど昨今の今頃は南極昭和基地への空路開拓をだれに頼まれたわけでもないのに好き好んで走り回ったあげく、お膳立てができあがった頃でした。ではと南極に出かける前に山仲間とヒマラヤトレッキングに出かけたのが11月10日過ぎでした。JARE 29には昭和基地で会うこととして見送りを割愛して秋のアンナプルナ、ドゥラギリを満喫してきました。帰国そうそう今度は「南極飛びある記」(極地47号昭和63年8月発行)となった次第です。そしてこの4月には北極に飛びお釈迦さまの日に念願の北極点にたち両極を踏んだ30人目となりました。そんなことをしているうちに古希が頼みもしないのに向こうからやってきて文字通り、いい年をしてといわれる分際に相なったわけです。」

懐かしい村山先生の語り口がよみがえってきた。

おしまいに、今年3月ヨットで、ニュージーランドへの航海に出たが、グアム沖で台風1号の余波をうけ、マスト変形航行不能のピンチに陥った。シャックルトンに祈り、村山先生のご加護をも頂いて幸いにニュージーランドへ向かう本船に救助され、オークランド経由空路帰国した。この失敗体験より思うことがあった。それは、やらなければならない企画、やりたい計画を、すべて成功裡になしとげられた、村山先生の偉大さにはほかに在りません。

すばらしさが空一杯に広がってきます。楽しい時間を沢山頂き有難うございました。

合掌

(8、12、21次冬・機械)

村山先生を偲んで

藏本恒造

今手許に「南極点への道」(村山雅美著 発行日昭和44年9月30日 第1刷)を置いてこの文を記している。

村山先生とのご縁は、命により私が第10次南極行動に初年兵航海長として参加したことに始まる。それまでは南極行動に参加するなど全く念頭にはなかったが、生まれて初めて南極の大自然に触れ感慨を深いも

のがあった。

特に昭和44年2月18日、F16地点へヘリコプターから降り立ち、南極大陸の大氷原を目の当たりにして、南極点旅行の壮大な航跡を改めて痛感させられた次第である。

先生とご一緒した帰路の「ふじ」艦内では映写会が毎日のように行われていたが、仮設スクリーンの最前列に置かれた観測隊長、艦長用の安楽いすは使用されず、艦の動揺を構わず常に最後部で立ったまま愛用のパイプを燻らせながら観劇されていた。

人伝に村山先生は旅行中雪上車に乗らず、殆ど徒歩で往復されたと聞いていたので、さもありませんと畏敬の念を深くしたことである。

平素は南極の大先輩に対し無礼を省みず「村山さん」と呼ばせて戴いていたが、これもご人徳のなせる業とお許し願いたい。

著書の「あとがき」の頭書に、「ブウベエ島」のことが記されているが、当時の松島茂雄艦長(故人)の命により航海長として近接針路を計画した。何故艦長が特命されたか疑問を抱いていたが、これを読んで多分村山さんのご提案があったものと推察し氷解したことを思い出す。

「ケープタウン」に向け北上中、昭和44年3月7日の早朝にレーダ

ー探知して接近、同島(概位 南緯54度26分、東経3度24分)付近で13:07~13:51の間、曇天下氷に覆われたおどろおどろしい島影を眺めながらドレッジを実施したことは、貴重な体験として忘れることができない。またこの島が1729年の発見以来一世紀半も確認されなかったことは驚きでもあった。

その後も折々に拝眉した際にはご懇切なご指導を戴いていたが、「ふじ」の予期しない老朽化から、早急に後継艦の建造を迫られた際のご活躍には、文字通り頭の下がる思いで感謝している。この度の「しらせ」後継艦の建造についても多大のご貢献をされたとお聞きしている。その完成を待たず、また「南極観測出港を記念する式典」の3日前にご逝去されたことは、さぞやご無念であったことと拝察する。

先生は南極地域観測事業の防人のお一人であるのみならず、本事業の推進に貢献された功労者として畏敬措く能わざる人でありました。特に南極点旅行において南極大陸の大氷原上に印された先生の足跡は、すでに氷化していることであろうが、生涯私の胸中から消すことはないとお誓いし、心からご冥福をお祈りする次第である。(17、18次ふじ艦長)

村山雅美隊長を偲ぶ

伊藤敦之

中学生の時、山岳部を創設し、ヒマラヤや極地は私の夢でした。『宗谷』が初めて晴海を出港した時は将に興奮の極に達しましたが、本観測が始まり、宗谷がビセットされたり、タロとジロがおいてけぼりになる頃には南極熱は徐々にさめてきましたが、その後、村山雅美越冬隊長の御高名は、何故か頭の一角に深く刻み込まれていました。

それから年月経て平成12年の夏頃防衛省（当時庁）前で偶然久松艦長に出会い、同期（相当）の気安さもあり、「オーイ」、「オウ」、「どこへ行くんだ」、「南極OB会」、「へえそりゃ何だ」、「極研・越冬隊・宗谷・ふじ・しらせ乗組員の合同懇親会さ」、「ふじなら会員資格はあるな、会長は村山さんだ」、「そんならいく」。無理やり押しかけ会員になりました。

初めて村山隊長にお目にかかり、その時頂戴した金浦のしらせ記念館の写真付名刺には、平成12年8月22日と記してある。「ホウ、君はふじの軍医長だったのか。マア、ここに座って飲め。」というのが村山隊長との初対面でしたが、その後、原潜とえひめ丸衝突や、露艦クルスク

の沈没など艦船事故があるといつも傍らで御進講申し上げるのが私の役となりました。ずい分物好きな人だなと思っていましたが、隊長は昭和16年12月東京帝大を卒業、兵科予備学生出身の海軍大尉と知ったのはその後、かなり経ってからでした。

村山隊長の思い出の中で最も忘れ難いのは、平成15年のヒマラヤ旅行です。羽田から関西空港までは予定通りでしたが、ネパール航空の飛行機の手配がつかず、ホテルで2泊して待機、夜は隊長を囲み飲み屋でドンチャンさわぎ、2泊目の深夜、一部（10名）がバンコック経由のタイ航空で、その後、本隊はまる2日おくれでカトマンズで合流し、隊長は思い出のマナスルベースキャンプへ行かれ、私はアンナプルナの見えるオーストラリアキャンプで露営をしました。ポカラでは山頂のホテルでのキャンプファイアで大いに盛り上がり、私は「都ぞ弥生」を歌ったのですが、アルコールのため歌詞を一部忘れてしまい、隊長は自校の寮歌を忘れるとは何事かと苦笑されていました。ポカラでは開館1ヶ月前に山岳博物館を見学できたり、カトマンズでは要人と懇談が出来たのも村山隊長の過去のご経歴と御人徳によるものと感謝いたしております。

この旅行中、ご高齢の方が多いの

で漢方薬エキス剤を持参し何人かの方に差し上げました。隊長も旅の終り頃にはお疲れのようでしたので真武湯漢方薬を差し上げました。上海空港休憩時、「御加減はいかがですか」とおたずねしたところ「ウン、いいよだね」とのことで一安心でした。帰国後南極OB会でお目にかかりましたが、そのうち欠席がつづき、南極観測50周年祝賀会を待たずして極楽浄土へ旅立たれたのは残念至極です。 祈冥福 合掌

(17次ふじ・医務)

南極出港時に“軍艦マーチ”を

松浦光利

約十年前、「しらせ」が南極に向け出港する時、晴海に見送りに行き、村山さんと一緒になった。従来通り海自音楽隊が来て壮行演奏を行った。その中に旧海軍の「軍艦マーチ」は無く、代わりに米海軍の「錨を上げて」が演奏された。これを聞いて、村山さんが憤慨気味に私に対して、「オイ！艦長、何故軍艦マーチをやらないのか、海自艦が出港するのに米海軍のマーチでは情けないぞ！君すぐに海幕に申し入れて早く正常に戻してくれ」と厳しい注文。私自身も全く同感であり、即座に引き受けた。早速、海幕南極支援室長(当時)を通じて、担当部長に申し入れ、改

善を期待した。それから一年が経ち、再び「しらせ」出港の日、11月14日を迎えた。「軍艦マーチ」への期待を胸に、村山さんも一緒に晴海に行った。音楽隊とは少し離れたところで演奏を見守った。ところが、円演奏開始とともに、最初に飛び出したのが以外にも「軍艦マーチ」だった。南極開始以来はじめての同マーチに、皆びくし、割れんばかりの拍手喝采を浴び、大変な好評を得た。

村山さんがいきなり、「万歳」を叫んだ。前年までは、防衛庁側の政治的配慮から、軍艦マーチの演奏を差し控えたとも言われたが、真相はわからなかった。以後、このマーチの演奏は出港式では定着し、継承されている。村山さんも天国で喜んでおられると思う。

簡単なことのようにであるが、前年の村山さんの時宜を得た発意がなければ実現困難なことであった。改めて、村山さんのご功績に対し感謝申し上げますとともに、これに協力できたことを嬉しく、懐かしく思う。

(8次ふじ・艦長)

村山雅美隊長の思い出

久松武宏

私が初めて村山隊長(以後、隊長と称する)とお会いしたのはいつか思い出せない。

南極観測が再開され、“ふじ”が処女航海の第7次南極行動で出港する時、私は横須賀に機関実習のため来ていたので晴海岸壁で見送った。その際、隊長を遠くから見ていたかもしれないが記憶にはない。



ふじの処女航海 (1965.11.20)

その後、私自身も南極行動に参加する機会を得て“ふじ”乗り組みで3回(第12、20、21次)、“しらせ”のぎ装員に引き続き、初代乗り組み(船務長)となり、以後6回(25、28、29、31、34、35次:最後の2回は艦長として)南極行動に参加した。



前列: 隊長、倉田艦長、和泉さん

(1986.11.14)

最初の頃、私にとり隊長は雲の上の人でお会いする機会はなく、遠くから姿を垣間見る程度であった。その後、第28次行動出港日、隊長は北極旅行に行った女優の和泉雅子さんを連れて“しらせ”にお見えになった。むかし高橋英樹と共演の「男の紋章」シリーズのファンであった私にとり、和泉さんの印象は、かの映画の面影はさらさらなく雪焼けしたアバタ顔は興ざめであった。

隊長とお話する機会が多くなったのは“しらせ”艦長の頃からで、次の配置の南極観測支援室長の時(平成7、8年)は白瀬中尉の出身地である金浦で白瀬中尉の大和雪原到達を記念して毎年1月28日に行われる雪中行進で一緒した。私が平成11年2月17日、隊長の肝いりで南極倶楽部が発足した。それ以

降お互いに意識して競ったわけでないが、平成17年前半まで出席回数は隊長か久松かと言われるように、お互い皆出席に近い出席日数であった。

平成12年のある南極倶楽部例会で、隊長から「東京裁判などの歴史をたどる防衛庁ツアーはできないだろうか・・・」という提案があった。当時の海上幕僚長はクラス・メート藤田海将であり、副官室と南極観測支援室から調整してもらい防衛庁ツアーが実現した。ツアー当日、藤田海幕長は外国出張中であり、山田道雄海上幕僚副長に表敬して、記念撮影後ツアーを開始する予定になっていた。

平成12年11月16日14:00見学者一行約30名が防衛庁正門前に集合した。ところが世話役の西部さんから「肝心の村山隊長が来ないので電話したらまだ家にいる、電話を代わって・・・」と言う。「隊長、今日は防衛庁ツアーですよ」「あっ！そうか。すぐ行く」との返事、お嬢さんの車に同乗し約20分遅れで防衛庁正門に到着した。

山田海幕副長を表敬した隊長は開口一番「元海軍軍人としてあるまじき航発後帰(船が出港してから港に帰ること、船乗りとして最も恥ずべき行為)をしまして、まことに申し

訳ありません」とお詫びをされた。山田海幕副長は笑いながら、にこやかに対応されたが、温かい雰囲気のもと、記念撮影を終了した。それからツアー参加者から「艦長、コーハツ・・・・とは何・・・」と言う質問があり、ツアーの途中、皆さんと更に親交を結ぶきっかけにもなった。

防衛庁ツアーの最後に、いろいろ調整してくれた南極観測支援室に立ち寄り解散することになっていたが、南極観測支援室を訪れた際、記念写真が完成しており、皆さんに持ち帰っていただいた。この写真の持ち帰りに皆さん大感激で、私の観測隊関係者に対する株が上がる機会にもなった。その後、特に第9次隊の方々、奥さんとは家内ともども親しくさせていただいている。

平成14年の河口湖畔極地研究所研修所でのミッド・ウィンター祭ではご一行が到着する前に、元海上自衛隊組3名は翌日の昼食に備えカレー作りを依頼されていた。飯塚元運用員長と私は仙波元調理員長の指示で切り込み、調理に入った。私は玉ネギの皮むきを担当したが約40名分のカレーを作る玉ネギむき、涙をボロボロ流しながらで大変な作業だった。玉ネギむきが終わったら仙波調理員長は「次はカレー粉をいって・・・」と言う。この作業も並大抵

のものではなかった。その夜は“ちんさん”こと小堺さんの素晴らしい屋台寿司に舌鼓を打ち、いつものこ



河口湖研修所(2002.6.21)

とであるが、隊長が休むまで延々と、早朝まで年齢を感じない恒例の大ミッド・ウィンター祭が行われた。

第9次隊の流山、高木八太郎氏宅での“たけのこ会”には平成13年以来、毎年家内を伴い参加させていただいた。第9次隊の方々の奥様方も参加され、料理の準備など、年季が入っていて、ご夫婦ともども動きは無駄がない。感心と言うより感動した。

隊長には私の地元の酒を楽しんでいただいたが、隊長の参加は平成17年が最後になった。



たけのこ会 (2005.4.26)

昭和基地と南極点往復に使用した雪上車の白瀬記念館での除幕式に参加するため金浦へ行ったバス旅行も大変楽しいものであった。平成12年10月19日、麴町で南極倶楽部定例会を行い、21:00頃に麴町を後にして金浦に向かった。バスの中での思い出は通路を隔てた後ろの席の隊長の斟がすごく大きかったことである。懐かしの酒田を通り04:30頃には金浦着、しばらく休んで浄蓮寺で白瀬中尉のお墓参りをし、白瀬記念館でのKD605の除幕式に参加した。昼食は鳥海山登山口鉾立の東雲(TDKの山荘)で取ったが、その時の隊長の紹介が一同の注目を集めた。

「高松宮様がこの山荘にお見えになった時、ここからの景色を見て『うちの兄貴の庭よりすばらしい・・・』と絶賛された・・・」等々である。



TDKの東雲荘

その夜の金浦の方々、秋田県に居住する元観測隊員とのバーベキュー、引き続いての懇親会では諸先輩の南極仕込みの飲み方には還暦前後の若者は圧倒された。

私事にわたり心苦しいが、結婚した一人娘夫婦に関することである。

平成15年の新年の南極倶楽部で、西部さんから「最近村山隊長は訃報ばかりで意気消沈している、まもなく娘さんが結婚するということだが、隊長の気分転換に新婚夫婦を呼んでもらえないだろうか？隊長から花束を贈ってもらおうから」とのお話があった。私は大変ありがたいことではあるが、即答はしなかった。隊長は私の気持ちを察するかのように「艦長、娘さんは南極倶楽部の会員でもあり、是非呼んで・・・」と言われた。そのような経緯で平成15年3月20日の南極倶楽部で隊長から娘夫婦に花束を贈っていただいた。(彼

らは当初、隊長のことはその辺のおじさん程度にしか考えていなかった節があるが・・・)。その娘夫婦に平成18年9月25日に男の子が生まれた。隊長に孫を持ったことをじかに報告できなかったことは非常に残念である。



隊長と娘夫婦

隊長との最後の写真は平成17年10月6日村山邸でのものである。その時の話題はもっぱら後継艦に関することであつた。

「名前は公募になるだろうけど“しらせ”は捨てがたいなあ・・・」「“しらせ”が退役しないと“しらせ”と言う名前は使えませんよ」「(いかにも残念そうに) そうかあ・・・」と言われたのが印象的であつた。

最後にお会いしたのは平成18年5月5日村山邸である。その時は“しらせ”が帰国した4月13日晴海で

取材を受け、4月20日（“ふじ”が昭和57年4月20日最後の南極行動から帰国した日）に放映された日本テレビの番組“みのもんだ”の「今日は何の日」のテープを日本テレビから送ってもらい持参した。蔵本艦長は“ふじ”が最も苦勞した頃のお話し、倉田艦長は“ふじ”“しらせ”両方の艦長をされた体験からのお話をされた。画面を見ながら「（今まで南極に関心がなかった）日テレがどうしてだろう・・・」と言われたが「今年は南極観測50周年だか



隊長との最後の写真（2005.10.6）

らだそうです・・・」と答えたら納得された。

隊長、いろいろお世話になりありがとうございました。安らかにお休みください。合掌

（12次ふじ・船務、34，35次しらせ艦長）

追記

告別式のお別れに際して、次期砕氷

艦の絵葉書を隊長の胸の上に置いた。

「地の果てに挑む」（この道）に「・・・そろそろ三途の川の適齢期なのだが『船がないから』と歩いて渡らされるのは御免を蒙りたいもので・・・」とあるのを思い出し、「隊長！お蔭様で立派な船が出来ることになりましたよ。三途の川も大船に乗って渡ってください」と申し上げお別れした。



平成 18 年 11 月 5 日 1657:ご逝去

平成 18 年 11 月 9 日 1800～1900:
お通夜

平成 18 年 11 月 10 日 1100～1230:
葬儀・告別式

南極倶楽部の創立と村山雅美先生

渡辺興亜

帝国劇場の近くの社員クラブとおぼしき所で開かれていた9次隊の集まりに最初に声をかけてもらったのは平成9年頃であったと思う。その後も何回か末席に連なっていたが、その内平成10年頃だったと思うが、

11次と29次隊と一緒に越冬した坂本幸吉さんが神田、須田町に「おんぐるや」を開店し、9次隊の会もそこで開かれることになった。

幸吉さんの開店の目的は南極のOB達が気軽に集まる店を持ちたいという事だったと思う。29次隊参加前までの高田馬場の店もそんな雰囲気のお店であった。村山さんと坂本さんは気が合ったらしく、店に9次隊の連中が集まるのを楽しんでおられた。残念ながら坂本さんは志半ばで早世し、やはり南極の調理担当だった渡辺さんが引き継いでいたある日、平成10年の秋であったと思うが、「だんちゃん、もっと幅広く集まる会ができないか」とのご下問があった。直感的にこれは南極観測隊OBが定期的に集まる倶楽部のような会の設立を意図しているのではと思ひ、その実現に犬馬の労をとることにしたのである。

親しさの度合いに個人差があるとしても、今では南極のOB達は宗谷時代から最近の観測隊までそれなりの繋がりを実感できるが、当時の私自身の感覚でいえば南極仲間の幅は限られたもので、同じ隊かその前後の隊員達との付き合い程度であったと思う。私は極地研究所に務めていたし、観測隊参加回数も多い方なので南極関係の知人は多い方だと思っ

ていたが、準備を始めてみると、それがいかに狭いかということの思い知らされたのである。

倶楽部設立の発起人の選定に入る頃から村山さんの指揮が際立ってきた。「宗谷」関係は誰、「ふじ」関係は誰、「長老」では誰と誰、という具合に指示され、その一人一人の賛同を取り付ける作業が続いた。南極OB達の人脈というか系列といったものは意外に複雑で、出身母体、隊での役割、隊次などが微妙に絡んだ世界だというのが実感であった。村山さんはそのすべての繋がり群の中核的存在か、繋がり間の欠くべからざる繋ぎ手の立場に居られた。村山さんのユニークな点は繋がり奥深さである。観測隊OBに留まず、村山さんの雰囲気の中に漂う多くの人たちが居られたことである。設立の作業に関わっていく中で、私は我が国の南極観測という大事業の奥行きとその人間的側面を見る事が出来たと思っている。

平成11年2月17日に発会パーティが催され、70名近い人々が参集された。それから8年、今年6月の例会で100回目を迎えることになった。残念ながら倶楽部設立を提唱された村山さんはすでに黄泉の国へ旅立たれた後である。

南極倶楽部の集いで培われた繋が

りは南極OB会の設立に発展し、南極観測50周年記念事業の展開となったのである。思えば村山さんは私たちにとって掛替えのない存在であった。
(11次冬・雪氷)

— 編集後記 —

南極倶楽部会報「南極」第23号をお届けいたします。本号は村山雅美会長の追悼号になりました。会員から村山会長を偲ぶ40編に及ぶ原稿が寄せられました。

発行日の平成19年6月21日は倶楽部例会の100回記念の日でもあります。この日も前の席でいつものように村山会長のユーモラスな挨拶があるような気がしてなりません。

神田啓史 大学共同利用機関法人
情報・システム研究機構 国立極地
研究所

〒173-8515 東京都板橋区加賀
1-9-10

Tel:03-3962-4761, Fax:03-3962-5701

E-mail: kanda@nipr.ac.jp